まちづくり①

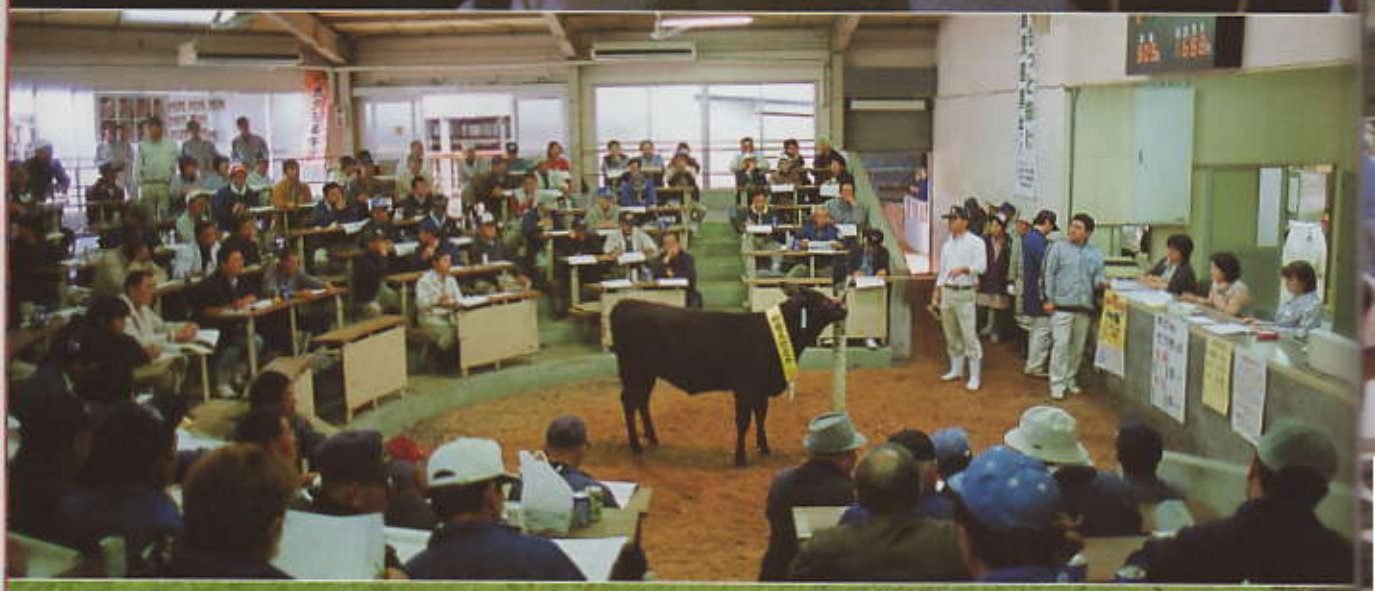
# せり出荷の代行と乾し草づくりで高齢農家を支援

鹿児島・菱刈町
和牛青年部

十一月八日、鹿児島県菱刈町和牛青年部の古川定志さんは仲間と二人で、朝八時過ぎ、子牛のセリが行われる伊佐家畜市場に、トラックで乗りつけた。荷台には近くの高齢農家などから預かった五頭の子牛が載せられている。ただちに子牛を一頭ずつトラックから降ろし、体重を測定し、けい留場につなぐ。この間、おとなしく引かれていく牛もいるが、なかには暴れ出す牛もいる。子牛とはいえ、体重は三百キロ前後。大の大人が振り回される場面もある。子牛をけい留し終わった古川さんたちは、再びトラックに乗り、別の子牛を引き取りに市場を出て行く。戻ってきた時は二頭の子牛が積まれていた。この日、運搬した七頭のうち一頭だけが、古川さんの所有する牛で、それ以外は運搬を頼まれた農家の子牛である。

けい留場には、子牛「かつ」の運搬を古川さんたちに依頼した小屋節子さんも来ていて、ブラッシングをしたり、最後の手入れに余念がない。そしてかつのそばを片時も離れない。

十時、セリが始まる。小屋さんの見守るなか、古川さんはかつをセリ市場に引き出す。価格を表示したボードの数字がめまぐるしく動く。高い値がついた。古川さんは、市場の一角に設けられている購買者専用牛舎までかつを運び、購買者に引き渡す。ほかの六頭も同じような手順が繰り返される。和牛青年部の他のメンバーも



古川さんと同様の作業を行う。この日はいつもよりは少なかったが、それでも三十八頭が青年部の手により運搬され、セリにかけられた。

この高齢農家の子牛出荷支援の活動を青年部が始めたのは、昭和六十一年にさかのぼる。

菱刈町の基幹産業は農業。稲作、畜産、たばこといったところが主な農産物。このうち肉用牛をあつかう農家は約三百戸、ご多分に漏れず高齢化はすすみ農業就業者の七割弱が六十歳以上という。高齢農家にとって、牛の飼育はたいへんな作業。肥料を与えるなど日常の飼育作業はできても、牛を家畜市場まで運ぶことは力を要するし、危険も伴なう。高齢農家にとっては負担は大きい。この負担に耐えられず牛の飼育を廃業するところもでている。このようなとき、町内の徳辺地区の若手農家三人が、高齢者農家の子牛のセリ市への出荷をかってでた。翌年からこの方式が町内全域に広がっていく。十五名の農家の若者で、和牛青年部が組織された。メンバーはすべて畜産農家。この十五人が、年七回開かれる子牛のセリの運搬を引き受けている。対象は、①六十歳以上で後継者のいない農家②婦女子農家③セリの時に冠婚葬祭などでどうしても、セリに出荷ができない農家など。記録の残っている平成四年度から平成十二年度までの子牛の出荷状況をみてみると、菱刈町内でセリに出された子牛の数は、総計約一万一千頭、

このうち青年部が取り扱った頭数は四千二百頭、全出荷数の約四十％にのぼる。これに、青年部自身の出荷数を加えれば、青年部が町全体の半数の運搬を引き受けていることになる。

同青年部のもう一つの大きな仕事が、高齢農家に乾し草を提供する仕事。飼料の生産はやはり高齢農家にとっては大きな負担。とくに機械を購入するのは高額なため、個々の農家、とくに高齢農家にとっては大きな負担になる。そこで、平成三年度から乾し草をつくり高齢農家に提供する活動も開始した。現在、作付け面積は十五町歩、十月に種を播き、施肥のうえ、四月に収穫する。なかでも収穫は、刈り取りから梱包まで雨に降られると乾し草をだめにしてしまうので慎重を要する。そして当日は、青年部だけでなく、奥さん方（奥さん方は、和牛婦人部を組織している）や農協・町役場職員にも協力を依頼する。そして十五キロずつ梱包された乾し草を市価より安く高齢者農家に安く提供している。

菱刈町に限らず農業の担い手の高齢化は大きな問題になっている。日々重労働の農作業をこなしながら、なお、セリ出荷代行と乾し草づくりという高齢農家を支援する活動をしている和牛青年部の面々から、明日の菱刈を支えていくという気概が感じられる。

■連絡先＝菱刈町役場
TEL〇九九五二―六―一一一一